

史上最強の技術帝国、日本の登場が最近話題になっている。特に活力を持ち出したのは中小企業の技術であるという。小さいところでは年に何千件と倒産するが、一方ではその何倍かが新しくできて、新陳代謝が激しい。だから、経済原則からちょっとはずれると、たちまち自然淘汰されてしまうという。かつての技術革新は大企業主導型であったが、今では草の根型が定着してきたともいう。恐い時代がきたものである。

本号を通読しているうちに、上記のような雑誌の記事を思い出した。本号は特別の企画に基づく特集号ではない。それなのに、極めてレベルの高い論文が食道、胃・十二指腸、小腸、大腸にわたり掲載されている。特集号以上に読みごたえがある。恐れ入った現実である。これは、全国的に各分野の基礎的技術が向上したためであり、それらを総合した研究が定着した結果である。

ただ問題なのは、一般にX線写真の印刷があまりよくないということである。他誌に比べれば、はるかにましであるが……。

従来、ドイツやわが国では、いわゆる“骨黒の写真”，アメリカなどでは“骨白の写真”が採用されてきた。そして、近年、わが国でもアメリカになり、骨白の写真が取り入れられるようになった。しかし、わが国の骨白の写真は質が非常によくないのである。アメリカとの落差は顕著である。一方、骨黒の写真の中にはすぐれた写真もみられるが、それは家内工業的な個人の努力によるものである。骨黒の写真も、ドイツに比べて見劣りするのが普通である。

ところで、X線写真の印刷が悪い最大の原因は、X線写真を焼き付ける技術がわが国では開発されていないし、それにお金をかけていないからである。特に医師側からの写真印刷の質についての強い要求がないからである。ちなみに、日本の印刷技術は世界の最高水準にあるという。これが今後の課題である。

<熊倉 賢二>